

Newsletter for JADR

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して

JADR 会長 高橋 信博

(東北大学大学院歯学研究科口腔生化学分野)



村上伸也前会長 (2011-2012) を引き継ぎまして、本年1月1日より第30代 JADR 会長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

1954年に16名の会員で発足した JADR がまもなく「還暦」を迎えます。現在では会員数1000名を超え、IADR の中で世界有数の Division へと成長いたしました。60年という年月で日本

を取り巻く環境は大きく変わりました。しかし、研究を基盤とした歯科医学の国際化の重要性は変わらず、現在のグローバル化時代においては普遍的なこと、あたりまえのことと捉えられるようになったと言えるでしょう。日本人研究者が IADR 大会に多数参加し、先端のあるいは基盤的で重要性の高い研究を発信し続けていることは、日本の歯科医学研究が海外から高い評価を受ける大きな理由の一つです。

私が JADR に入会したのは1987年 (大学院3年次) で、当時、海外旅費が大変高価であったため、IADR 大会に参加することは容易ではなく、JADR 大会に参加することが国際化への第一歩でした。山田 正先生 (東北大学名誉教授) が JADR 会長をされていた頃、第44回大会 (1996年、福島県裏磐梯) を研究室が担当することとなり、手探りで学会運営に携わったことがあります。海外研究者を招聘して行われた学会シンポジウムでは、英語による活発な議論が展開され、日本で日本人同士が英語で議論することに若干の違和感を覚えたものの、近い将来はこれが普通になるであろうという予感を持ったことを覚えています。その後、2003年より JADR 理事会に加えていただき、高野吉郎会長 (東京医科歯科大学) の元で会計担当理事 (2009 - 2010年)、村上前会長 (大阪大学大学院歯学研究科) の元で副会長 (2011 - 2012年) を勤め、現在に至ることとなりました。

この10年、JADR は大きな変貌を遂げました。それは、JADR に相応しい新事業を展開することで会員の先生方への還元を図ること、JADR 独自の国際化事業を通して国際貢献を図ることの2点に集約されます。前者においては、News Letter の配信によって JADR ならびに IADR に関する情報発信を促進することや、各種学会賞 (JADR 学術奨励賞、Joseph-Lister Award 等) を設けることで若手研究者育成を支援することが挙げられますし、後者にお

いては、IADR Hatton Award 国内選考を本選と同様に実施することで JADR 会員の受賞の獲得を促進することや、アジア地区の Division/Section の若手研究者を対象とした JADR Travel Award の設置によるアジア諸国との交流促進とアジア地区研究者の育成支援が挙げられるでしょう。さらに、第58回大会 (2010年、北九州) からは全ての発表を英語で行うこととし、名実共に、IADR の Division としての国際学会となりました。

国際化が叫ばれて既に久しく、歯科医学研究者にとって海外での研究発表は普通のこととなりました。世界への Gateway として JADR が機能しているのは事実ですが、現在では IADR 参加者数が JADR 参加者数を上回ることもあり、JADR は「国際舞台で研究発表を行う」という所期の目的の一つを達成したと言えるでしょう。しかし、国際的な研究活動とは学会発表だけではなく、国際共同研究等の国際共同活動こそが真に求められるものでしょう。IADR には Research Group が多数あり、共同的に情報交換や研究活動を行っていますが、日本の貢献はまだ限定的と言えるようです。換言すれば、国際共同活動、とくに組織化の部分で JADR がお手伝いできる可能性があるということです。近年、JADR が日本歯科医学会の国際学術交流の窓口として位置づけられたことは大きな進展であり、その実質化が JADR の取り組むべき課題といえるでしょう。

今後、歯科医学は、これまでの細分化から一転し、分野間の連携・融合研究が増加するとともに、歯科医学以外の学問分野との連携が必要となるでしょう。これはどのような学問でも生ずることであり、新たな競争を生みますが、同時に新たな展開のためには必要なことです。JADR は全ての歯科医学領域を包含した総合国際学会であり、連携的・融合的な学術活動を行い得る数少ない学会です。その特徴を如何に活かして学会活動を展開して行くかがもう一つの重要な課題です。近年、各学会が連携して年次学会を開催する等の連携・共同活動が増えており、JADR はそのような場の提供や自ら学会を共催することを通して、連携・融合研究の進展に寄与できるものと思います。

2年間の会長職の間にごくまで実行・達成できるかは分かりませんが、理事会メンバーの先生方のご協力と会員諸兄のご支援を得て、次の60年に向けて、国外的にも国内的にも日本を代表する学会であるよう、微力ながら尽力して参ります。どうかよろしくお願いいたします。

II. JADR 会長退任のご挨拶にかえて

村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座 (口腔治療))

2012年12月31日をもって、JADR会長の職を退任いたしました。2年間の会長職を大過なく終える事が出来たのは、会員の先生方のご支援・ご理解の賜です。また、理事会メンバーの先生方にも、献身的に会務を支えていただきました。この紙面をお借りいたしまして、心より御礼を申し上げます。

私が会長としてみずり組みねばならなかった課題は学会会計の緊縮でした。ご存じのように、JADRの収入の大部分は米ドル建てで行われております。2008年頃までは、1US\$=100円あたりであったのが、2009年のリーマンショックで80円台に、2010年のギリシャ金融危機以来80円前半に、2011年には戦後の最高値を更新し、それ以降1US\$=70円台が続いております(安倍政権誕生に向けて80円台へ戻ってきているようではありますが)。このような背景からここ数年JADRの学会の収入が約2割減少する状況が続いておりました。会計担当の山崎理事と共に支出の削減にも努めてまいりましたが、会員の先生方のbenefitを低下させること無く安定的にJADRの会務を遂行するために、総会・評議員会のご承認を受けて2012年度より円建てで6000円相当をJADR年会費とさせていただきますことになりました。会員の先生方におかれましては、どうぞご理解下さいますようお願い申し上げます。

その一方で、JADRの国際的なプレゼンスが、益々高まっていくのが実感された2年間でもありました。2011年度のIADRのvice president選挙では、安孫子宣光先生が見事に選出されました。これはJADRのみならずIADRでの安孫子先生のご貢献が高く評価された結果です。安孫子先生は、2013年にpresident elect、2014年にpresidentの要職に就かれることになります。安孫子先生らしさを全面に押し出したIADR運営を、JADRとしても応援させて頂きたいと思っております。また、2010年の第58回JADR学術大会(大会長:西原達次教授)から、学術大会の公用語を英語にいたしました。初回ということで、西原大会長には色々とお苦勞をおかけいたしました。その

後、2011年第59回学術大会(大会長:高田隆教授)、2012年第60回学術大会(大会長:山崎和久教授)と回を重ね、いずれの学術大会においても外国からの参加者が増え、ポスター会場でもそこかしこで英語にてdiscussionしている様子が、普通の光景として見られるようになりました。アジア地域のIADR division, sectionから推薦された若手研究者にTravel awardを授与して、JADR学術大会への参加の機会を提供してきた努力も、少しずつ実を結んできているものと思います。また、第60回学術大会では山崎大会長の発案で日本補綴歯科学会とのco-organized symposiumが開催されました。JADRに期待される国際性と学際性が様々なかたちで具現化されてきており、JADR学術大会のさらなる進化にご期待いただきたいと思います。

任期中の出来事として決して忘れることの出来ないのは、2011年3月11日に発生しました東日本大震災です*。震災直後に開催されましたSan DiegoでのIADR学術大会におきまして、IADR会長や多くの外国研究者の方々からもお見舞いの言葉を頂きました。直ちにIADRのホームページを介して、JADR会員からの義援金の受付をお願いできないかとIADR本部に交渉いたしました。システムの関係で対応いただけませんでした。そこで、JADRのホームページを介してJADR学術大会参加登録を行っていただく際に、optionalとして義援金(お一人1000円)を受付できるようにいたしました。この義援金は被災地の生徒・学生の方々の就学の支援を目的と致しております。どうかご理解を賜り、末永いご支援をお願い申し上げます。

最後になりましたが、私の拙い学会運営を献身的に支えて頂きました事務局の中倉、西山両氏に、心より感謝申し上げます。

*被災された方々には、心よりお見舞いを申し上げます。

III. 新任・退任理事からの挨拶

1. 理事退任のご挨拶

西原 達次

(九州歯科大学健康増進学講座感染分子生物学分野)

2009年から4年間、JADR高野吉郎会長(2009-2010年)お

よび村上伸也会長(2011-2012年)のもとで理事を務めさせていただきました。理事就任時の挨拶の文章の中で、歯科研究の学際領域への展開を目指す必要性について述べさせていただきましたが、振り返ってみますと、この点に関しては、学術大会の開催を通じて貢献できたのではないかと考えています。それ以外にも、理事としていろいろな経験をさせていただきました。あらためて深謝申し上げます。

これまで、Newsletter for JADRで多くの先生からご案内いただきましたが、第58回JADR学術大会(2010年11月)を主催し、使用言語の完全英語化に取り組みました。理事会で、JADRから海外への発信、あわせて、JADR学術大会を通じて

若手研究者の英語発表能力を涵養するということが真摯に議論され、そのことを具現化するために努力したことが昨日のことのように思い出されます。学術大会当日の口頭発表およびポスター発表の場で、若手研究者が英語でディスカッションしている姿を目にして、日本で定期的に国際学会の雰囲気を楽しむことの素晴らしさを実感しました。今後、若手研究者が世界に飛翔する環境作りという点で、先駆的な大会運営だったという評価をいただければ、九州歯科大学の一員として、この上ない喜びです。

さらに、この学術大会では、特別講演のほかに3つのシンポジウムを企画しましたが、そのなかで、北九州地区で展開している歯工学連携事業の一端を紹介し、今後の歯科医学の研究における一つの方向性を提示しました。その後、九州歯科大学が代表校となり、北九州工業大学、北九州市立大学、産業医科大学との連携で、2012年文部科学省「大学間連携教育推進事業」に研究課題を申請し、地域連携枠で事業が採択されました。今後、本学が他領域と協働活動を展開し、医歯工連携を進めることで得られるものは大きいと考えています。これから、国民の健康増進および生活支援という視点で得られる事業成果を様々な形で発信してまいりますので、注目していただければ幸いです。

私自身、4年間の理事会活動を通じて、我が国の歯科医学研究成果を世界に発信することの重要性を実感しました。その後、2012年4月に九州歯科大学の学長を拝命し、学術研究のみならず、さまざまな分野で、グローバル化が進んでいることを肌で感じ、2013年に九州歯科大学の英語表記を Kyushu Dental College から Kyushu Dental University に変更することとしました。この紙面をお借りしてお知らせいたします。

これからも JADR の一員として学術活動にご協力するとともに、2014年まで IADR/AADR William J. Gies Award Committee のメンバーとして、IADR の活動のお手伝いさせていただきます。

それでは、末尾になりましたが、JADR が高橋信博会長をはじめとして次期理事会メンバーのもとで、より一層の発展を遂げられることを心から祈念申し上げて、挨拶の言葉とさせていただきます。

2. 理事を拝命して

—To show presence of Japan—

今里 聡

(大阪大学大学院歯学研究科歯科理工学教室)

このたび、高橋信博会長のご高配により JADR の理事を拝命致しました。その重責に身を引き締めつつ、自己紹介を踏まえてご挨拶をさせていただきます。

私は、1987年に JADR, IADR に入会し、1994年のシアトル大会以降、ほぼ毎年 IADR General Session に参加しておりま

す。その中で、次第に IADR 本会の活動に関わるようになって参りました。活動の中心は Dental Materials Group (DMG) であり、友人・知人の輪が広がるに伴い、program organizer 等を依頼されるようになりました。そのような経緯で、DMG の Secretary を務めた後、2008～2009年に DMG の President を拝命致しました。DMG は1000人を超えるメンバーが所属する IADR 最大のグループであるため、その活動をリードするのは大役でしたが、大変貴重な経験をさせていただきました。また、IADR 本会からの依頼を受け、2007～2010年の4年間、IADR Hatton Awards Committee の委員として賞の選考を担当させていただきました。現在は、Publications Committee と Fellowships Committee の委員の他、2010年の創設以来、Heraeus Travel Award の選考委員長に任に当たらせていただいております。

これらの活動を通して、IADR という学会がどのようなシステムで動いているか等、多くのことを学ばせていただきました。これまで JADR そのものにはあまり貢献できていない私に理事の命をいただいたのは、IADR 本会に関わってきた経験や知識を須く JADR の発展に反映させて欲しいという高橋会長のご要望であろうと推測しております。先達の方々のご尽力のおかげで、日本の研究や学会への貢献度に対する評価は年々上がっております。しかしながら、米国に続いて二番目の会員数を誇る日本という division がまだまだ正当に評価されていないことを実感することも少なくありませんでした。JADR を独自の国内歯科総合学会と位置付けることもありえますが、日本の歯科関連学会の国際窓口となれる重要な組織であることを考えると、やはり IADR と共に発展すべきであると言えましょう。そして、そのためには、若手研究者の JADR/IADR 活動への積極的な参加が必須です。若手がすすんで国際的に交流し、学会活動に関与する姿勢を示すことが日本の認知レベルを引き上げ、ひいては Hatton Awards 等の受賞にも有利に働くこともまた事実であります。

研究の学際化が叫ばれて久しい今日、さまざまな分野のエキスパートとの交流が重要であることは論を俟ちません。そう考えると、JADR ほど異分野の研究がクロスオーバーできる有益な学会は他にありません。専門学会での微に入り細を穿つ研究活動と並行して、普段接することの少ない他領域の知識を吸収し、異なる specialty の研究者が集う場で多面的に議論することは極めて有意義ではないでしょうか。また、国内で年次開催される歯科関連の学術大会で、公用語を英語にしているものはそう多くありません。その意味でも、若手研究者にとって、JADR は自らをステップアップさせる絶好の機会と言えます。積極的な広報活動を行って JADR をそのような場として若手に認識してもらうことも、理事の務めであると考えております。

日本の一研究者としてだけでなく、今後は JADR の理事としても、"To show presence of Japan" を胸に努力して参りたいと思いますので、皆様のご支援とご指導を何卒よろしくお願い致します。

3. 理事就任にあたって

上條 竜太郎

(昭和大学歯学部口腔生化学講座)

この度、高橋信博会長の下、新たにJADR 理事に加えていただく事になりました。歴史と伝統を誇る本学会において、その運営の一部をお手伝いさせていただくことはこの上なく光栄なことでございます。誠に微力ではございますが、高橋会長、高田副会長、村上前会長、理事の先生方の御指導を賜りながら、本学会の発展ならびに歯科医学および関連分野の研究促進と口腔保健の向上に貢献できれば幸と存じます。

我が国が科学研究・教育の両面で更なるグローバル化を推進することが求められていることは、理の当然です。また、科学技術の進歩により多彩な研究領域の融合が進み、画期的な研究成果が次々と生み出されています。世界最高水準の歯学研究を展開している我が国の歯学研究といえども例外ではなく、異分野間の研究連携・融合をさらに進め、歯学各分野の個別の研究努力では解決が困難とされてきた諸問題の解決を図ることが求められています。JADR は 1954 年の発足以来、多岐にわたる歯科関連専門分野を網羅し、かつ国際交流を効果的に推進しうる我が国唯一の学術組織として中心的役割を果たしてきました。その重要性が今後ますます高まることは

間違いございません。

一方、歯学研究の将来が、国際水準で活躍できる若手研究者の育成にかかっていることも周知の事実です。そのための第一歩は、高い理想を持ち、自ら新しい歯学を切り拓くことの出来る創造的研究者が育つ体制を構築することではないでしょうか。JADR はこれまで、人材育成に関する豊富な経験と幅広いネットワークを基盤に、様々な分野で将来の歯学を支える指導的人材を世界に輩出して参りました。学部学生、大学院生、若手研究者の皆さんが、JADR そして IADR を通じて世界へ羽ばたいていくことを願い、そのお手伝いをさせていただければと思います。

私が JADR に入会させていただきましたのは 1998 年です。以来、一会員として多くのことを学ばせていただきました。今日ほど国際学会で発表する機会が豊富でなかった当時、JADR の学術大会において、英語でポスター発表させていただいた経験は、今日の研究の礎としてなっております。また私は当時、口腔外科学を専門としておりましたが、現在は口腔生化学の研究、教育に従事しております。臨床講座に所属した経験は現在の生化学の基礎研究にも役立っています。今後はこれまでの経験を生かし、理事として JADR の発展に少しでも貢献し、これまで受けた恩恵に報いるべく努力する所存でございます。今後とも御指導御鞭撻の程、何卒宜しく申し上げます。

IV. 第60回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告

1. 第 60 回 JADR 総会・学術大会統括報告

大会長 山崎 和久

(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)

第 60 回 JADR 総会・学術大会を平成 24 年 12 月 14 日 (金)、15 日 (土) の両日、新潟コンベンションセンター (朱鷺メッセ) で開催させていただきました。会期の 1 週間前にはこの時期でもきわめて珍しいほどの悪天候に見舞われ、交通機関に大混乱を来たし、大変心配しましたが、新潟にしてはまずまずの天候に恵まれ国内各地より多くの方に参加いただきました。また、一昨年の北九州大会より試験的に一部導入し、昨年の広島大会より本格導入された発表と討議はもとよりすべての運営の完全英語化も定着し、その結果、海外からも過去最高の参加者をお迎えして総会・学術大会を無事終えることができました。これも、村上会長をはじめとする学会関係者の皆様方のお力添えに依るものと、心より感謝申し上げます。

日本では還暦、西洋社会では Diamond Jubilee となる第 60 回の本学術大会では「60 Years of the JADR - Future Perspectives of the Dental Science」を学会のテーマとさせていただきました。諸先輩方の並々ならぬご苦労により IADR への gateway として

発展し、研究をリードしてきた JADR ですが、ここ数年は会員数や学術大会参加者の伸び悩みが続いていました。こうした状況を鑑み、今後の JADR の発展、歯学研究の進歩を考える良い機会になればと思案し、決めた次第です。特別講演は例年通り、IADR 会長 (Prof. Mary MacDougall)、KADR 会長 (Prof. San-Wan Shin) に加え理化学研究所オミックス基盤研究領域の林崎良英先生をお願いいたしました。オミックスのアプローチは今後の歯学研究においても大変重要なものであり、その方向性を理解し、応用方法を検討する上で非常に有益な講演となりました。林崎先生はマウス完全長 cDNA ライブラリーを作成し、京都大学山中伸弥教授はこれを用いて iPS 細胞誘



理事懇親会において

導に必要ないわゆる山中因子を同定したことはよく知られています。山中教授のノーベル生理学・医学賞受賞直後というタイミングもあって、広い会場は多くの聴衆の熱気で埋め尽くされ、時間を超過するほど熱心に質疑応答が行われました。また、シンポジウム1として、本大会のテーマに合わせ、歯学領域で優れた研究を行っており、日本学術振興会の“最先端・次世代研究開発支援プログラム”に採択された若手研究者4名による”The Cutting Edge of Dental Science in Japan”, シンポジウム2としては、歯科のみならず医科領域においても注目されている、口腔疾患の全身に及ぼす影響について精力的に研究している5名の研究者による”Impact of Oral Health on the Systemic Health”, シンポジウム3としては補綴学をバイオロジーの観点で研究している3名の研究者により”Biological Perspective of Future Prosthodontics”という各テーマに沿ったご講演をしていただきました。今回、初の試みとして一般発表はすべてポスター形式にいたしました。ディスカッションの時間はすべての参加者がポスター会場で発表者と時間を共有して討論することを目指しましたが、期待以上の盛り上がりを見せていました。

総会の最後に来年バンコクで開催される IADR-APR の事務局長 Pasutha 先生による概要紹介が行われました。IADR-APR 大会が開催される年は JADR の総会・学術大会は IADR-APR と併催となります。Pasutha 先生からは多くの JADR 会員の参加を期待している旨のご挨拶をいただきました。懇親会では Hatton Award 日本代表4名、学術奨励賞受賞者5名 JADR Travel Award 受賞者4名、今回新設された学部学生を対象とした Lister Award 受賞者3名の表彰式が行われました。これからを担うであろう若手研究者の誇らしげな表情とそれを見守る指導教員の笑顔が印象的でした。懇親会の最後には次期会長である東北大学の高橋先生より御挨拶をいただき、バンコクでの再会を誓ってお開きとなりました。

最後に、本学術大会・総会の実施に当たり、ご協力をいただきました学会事務局の皆様方に厚く御礼申し上げます。また、多くの参加者の方からプログラムと運営にお褒めの言葉を頂戴いたしました。これもひとえに準備委員長の多部田康一准教授をはじめとする新潟大学大学院医歯学総合研究科“歯周一全身プロジェクト”のスタッフの大変な努力によるものであり、この上ない感謝の意を表します。



IADR 会長 Dr. MacDougall と



KADR 会長 Dr. Shin と



理化学研究所 林崎先生と

2. シンポジウム I 報告

Distinguished Lecture Series —The Cutting Edge of Dental Science in Japan —

高野 吉郎

(東京医科歯科大学大学院硬組織構造生物学分野)

2012年12月14日午前9時より Symposium I, Distinguished Lecture Series, "The Cutting Edge of Dental Science in Japan" がオープニングシンポジウムとして開催された。タイトルが示すように、本シンポジウムでは、口腔生命科学の様々な領域で尖鋭的な研究を進めておられる4名の先生方をお招きし、それぞれの領域における最新の研究成果をご講演いただいた。

まず、東京医科歯科大学の中川一路教授(細菌感染制御学)から、Streptococciに見られる病原性の多様性と prophage の関わりに関する比較遺伝学的見解が紹介され、更に宿主細胞への病原性細菌の侵入と、細胞内でのオートファジーシステムとの攻防に関する詳細な解析から、細菌が宿主細胞内でオートファジーを逃れるために特殊なたんぱく質を産生するという興味深い知見が紹介された。

東北大学の福本 敏教授(小児発達歯科学)は、歯原性上皮細胞(SF2)上で歯髄 iPS 細胞を培養すると、iPS 細胞からエナメル芽細胞のマーカーを発現する上皮細胞が誘導されること、そしてこの過程に SF2 が産生するアメロプラスチンが関係することを明らかにし、歯髄 iPS 細胞と歯原性上皮細胞 co-culture システムの歯の再生研究への有用性を示した。

徳島大学の石丸真澄教授(口腔分子病態学)からは、唾液

腺や涙腺へのリンパ球浸潤を伴う組織破壊によって、重篤な口腔乾燥症やドライアイを引き起こす自己免疫疾患であるシェーグレン症候群（SS）の発症に、血中エストロゲン濃度の低下が関係すること、白色脂肪にはマクロファージや樹状細胞が集積し、それらが産生する炎症性サイトカインによって白色脂肪組織にはSS様病変が惹起されやすいという興味深いデータが示された。

最後に広島大学の兼松 隆教授（歯科薬理学）は、自ら発見したPRIP（PLC-related catalytically inactive protein）にGABAA受容体シグナリング調節分子としての機能に加え、protein phosphataseと複合体を形成して脂肪分解を負に制御する機能があること、更に、PRIPがオートファジーの制御にも関わっている可能性を示唆する詳細なデータを紹介した。

今回の4つの演題は、異なる分野を代表してのご講演であったが、期せずして相互に深く関わる内容を含んでおり、従来の研究領域の垣根を越えた学際的研究の進展を強く印象付けるものとなった。本シンポジウムの趣旨が、JADR会員に広く本邦のトップレベルの研究を紹介する点にあったことは異論のないところと思われるが、同時に、IADR会長をはじめとする海外からの参加者に、日本の口腔生命科学の優れた研究の一端を知っていただくこともJADRの重要な役割りと考えている。その意味でも素晴らしご講演いただいた中川先生、福本先生、石丸先生、兼松先生に厚く御礼申し上げます。

3. シンポジウムⅡ 報告

Impact of Oral Health on the Systemic Health; Lessons from Human and Animal Studies

天野 敦雄

（大阪大学大学院歯学研究科予防歯科学）

1990年代より口腔の健康が全身の健康に少なからざる影響を与えていることを示す報告が相次いでいる。今では、様々な全身疾患の発症・進行が口腔環境の影響を強く受けていると考えられているものの、その科学的根拠は未だ十分とは言いがたい。このような背景を受け、今回のシンポジウムでは、本研究領域における日本のトップリサーチャー5名を招聘し、ヒトを対象とした大規模疫学研究ならびに動物モデルを用いた研究成果を発表頂いた。

まず、山下喜久先生（九州大学大学院歯学研究院 口腔予防医学分野）に、1961年に始まった久山研究の成果をご発表頂いた。福岡県久山町では過去50年にわたる住民健診により、生活習慣や体質と病気の関係などが研究されている。同町の性別や年齢、職業の構成比は日本の平均とほぼ重なり、日本全体の縮図と見なされている。同住民の健診結果の分析から、歯周病がメタボリックシンドロームに密接に関連することを世界に先駆けて見出したことは日本発の重要な研究結果であり、更に2007年の健診結果から男女間でその関連性に明確な

差が存在することをお話頂いた。これらの結果は、単に疫学研究成果の新知見というだけでなく、歯周病病因論解明の実験研究モデルを考える上で重要な示唆を与えるものであった。

次に宮崎秀夫先生（新潟大学医歯学総合研究科 予防歯科学分野）に、1998年から実施している新潟市の高齢者コホート研究（新潟高齢者研究）から得られた成果をお話頂いた。咬合状態と身体機能および死亡との関係に焦点を絞った解析の結果、咬合支持域数（EI）と運動能力・身体機能には明らかな関連が認められること、EIが低いと以降8年間に下肢筋力およびバランス機能の低下リスクが4～5倍高くなること、さらに低い下肢筋力は10年間の死亡予測因子となることを明確にお話し頂いた。

江國大輔先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 予防歯科学分野）には、歯周病と全身との関連における酸化ストレスの役割についてご発表頂いた。歯周病と全身の双方向の関係を考えるうえで、酸化ストレスは重要な因子の一つである。そこで、ラットモデルを中心に用いた検討の結果、血液中の酸化ストレスの増加に伴い各臓器の病変が誘導された。さらに、肥満などの全身疾患が酸化ストレスを介して歯周組織に損傷を与えることが示され、酸化ストレスの制御が口腔と全身の健康を確保する新規戦略となる可能性を話された。

仲野和彦先生（大阪大学大学院歯学研究科 先端小児口腔保健学分野）からは、*Streptococcus mutans*と循環器系疾患の関連についてお話頂いた。新規の血清型特異多糖抗原をもつ*S. mutans*臨床分離株を見だし、2004年に新規血清型・k型を定義した。k型株はう蝕原性は低いですが、循環器系手術における摘出検体から高頻度に検出されるとともに、菌体表層に強固なコラーゲン結合タンパクを有しているものが多い。さらに*S. mutans*による菌血症は、脳出血や炎症性腸炎の悪化等にも関与している可能性も示された。

最後に、多部田康一先生（新潟大学研究推進機構 超域学術院）に歯周炎と動脈硬化性疾患の関連メカニズムについて考察頂いた。歯周炎・動脈硬化症モデルマウスを用いた研究の結果、両疾患の関連メカニズムに「炎症」と「脂質代謝の変化」の2つの作用が関与していることを示された。この結果からは、既存の歯周炎の臨床検査（プロービングによる指標等）に加えて、疾患関連メカニズムに基づく全身への影響を評価する生物学的指標の開発が今後の疫学研究や将来の臨床応用に必要であると考えられ、更なる研究の方向性を示して頂いた。

これらの発表は、これからの口腔と全身の関連メカニズム解明にむけ、我々が進むべき道を明確に示す有意義なものであった。

4. シンポジウムⅢ報告 Biological Perspective of Future Prosthodontics

魚島 勝美

(新潟大学大学院医歯学総合研究科生体歯科補綴学分野)

本シンポジウムは社団法人日本補綴歯科学会の企画協力を得て開催した。歯科補綴学が主にその研究対象とする領域は有床義歯等の可撤性義歯、固定性義歯、デンタルインプラント、顎運動、咬合、咀嚼、顎関節などである。従来、これらの研究は主に材料学的側面や臨床的な側面からのアプローチを中心に行われてきており、その結果現在の補綴歯科治療が確立されてきた。もちろん、現在でも解明すべき課題は多く残されており、これらの研究を継続的に行うことは我々歯科補綴学の専門家にとって、ひいては一般の臨床家にとって非常に重要である。しかしながら、生体に直接介入しないかに見える補綴治療と雖も、その結果が何らかの生体反応を惹起することもまた事実であり、我々の先達が積み上げてきた治療方法によってもなお解決できない臨床的な不都合を解決するためには、その背景にある生体の反応を解明し、これをコントロールする必要がある。とりわけデンタルインプラントの普及によって、補綴治療の専門家がこれに介入する現状では、何らかの治療行為に対する生体反応の本質を見極める必要性が高まったことは事実である。

近年では遺伝子工学や細胞生物学の基礎的研究手法が普及し、様々な生体反応の分子基盤を解明することが可能となった。そこで、今回のシンポジウムでは補綴歯科学会において行われている基礎的研究、特にデンタルインプラントに関連した研究を中心に紹介し、本学会における近年の研究のあり方、今後の方向性を広く紹介することを目的として、3名のシンポジストを招いてご講演いただいた。

大阪大学の江草先生には口腔粘膜を用いたiPS細胞の確立と、臨床応用の可能性について、九州大学の牧平先生にはインプラント周囲炎に関連すると思われる免疫反応について、新潟大学の秋葉先生にはヒストン脱アセチル化酵素阻害剤を用いた骨代謝コントロールの可能性についてお話しいただいた。いずれの研究も歯科補綴学やデンタルインプラントに密接に関連し、かつ重要な臨床的意義を持つ研究である。今後、歯科補綴学が目指す研究の方向性の一つとして、臨床と基礎を繋ぐ研究を推進することの重要性が提示されたものと思う。

本シンポジウムが歯学研究者の横の繋がりを促進し、今後の一層の研究成果に繋がることを期待したい。

V. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

1. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

Emilio Satoshi Hara

(Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine
Okayama University - Graduate School of Medicine
Dentistry and Pharmaceutical Sciences)

Firstly, I would like to express my profound gratitude for being nominated as one of the JADR/GC Young Investigator Award winners on this occasion of the 60th Meeting of the Japanese Association for Dental Research (JADR) held in Niigata City. It was a great honor and privilege for me to be selected among many young investigators doing high level researches.

In this JADR meeting, I presented my current data entitled: "Potent chondrogenic differentiation of human bone marrow stem cells by fluocinolone acetonide". In a few words, we performed a high throughput screening of 640 FDA-approved drugs, and identified the glucocorticoid fluocinolone acetonide (FA) as a compound that strongly enhanced transforming growth factor- β (TGF- β)-induced chondrogenesis of human bone marrow stem cells (hBMSCs), confirmed by increased safranin-O staining of histological sections for deposition of glycosaminoglycans and immunohistochemical analysis against collagen type II (COL2); as well as by increased mRNA levels of cartilage markers COL2 and aggrecan (ACAN), and that of the master regulator of chondrogenesis, SOX-9. A pathway array identified mTOR/AKT as a signaling pathway involved in FA-enhanced chondrogenesis. Inhibition assays with inhibitor of glucocorticoid receptor (mifepristone), inhibitor of mTOR (rapamycin) completely inhibited FA effect. Interestingly, inhibition of AKT completely inhibited chondrogenesis. These results showed a novel role of mTOR/AKT signaling pathway in chondrogenic differentiation of hBMSCs.

Finally, I would like to extend my gratitude and appreciation to all collaborators in this work, mainly to my supervisor Prof. Takuo Kuboki for the inestimable support during the years of my doctorate course.

2. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

野村 良太

(大阪大学歯学部附属病院小児歯科)

この度、第60回JADR学術大会において発表いたしました「Cell Surface Proteins of *Streptococcus mutans* Contribute to Infective Endocarditis」という演題に対して、2012年度学術奨

励賞を受賞することができました。このような賞をいただきましたことを大変光栄に思います。

う蝕の主要な病原細菌である *Streptococcus mutans* は感染性心内膜炎 (Infective endocarditis; IE) の原因菌としても知られています。本研究では、*S. mutans* の主要な菌体表層タンパクとして、歯面への初期付着に関与する 190-kDa の Protein antigen (PA) と 120-kDa のコラーゲン結合タンパク (CBP) という 2 つのタンパクに着目し、これらのタンパクの発現の有無と IE の病原性に関する分析を行いました。供試菌として、小児口腔由来の MT8148 株 (PA+/CBP-)、IE 患者血液由来の TW871 株 (PA+/CBP+) およびこれらの PA をコードする遺伝子を不活化した MT8148PD 株、TW871PD 株を使用しました。これらのうち、TW871 株および TW871PD 株は CBP の存在により高いコラーゲン結合能を呈しました。特に、TW871PD 株は、PA が欠失することにより菌体表層電荷が強く負に帯電しており、正の電荷を有するコラーゲンとの電気的な結合が生じることから、極めて強いコラーゲン結合能を有することが分かりました。このような強いコラーゲン結合能により、TW871PD 株は他の菌株と比較して、ヒト臍帯静脈内皮細胞への有意に高い付着侵入能を示しました。また、口腔より分離した *S. mutans* 臨床分離株 200 株の PA と CBP の発現状態を分析したところ、約 90% は PA 陽性かつ CBP 陰性株である一方で、PA 陰性かつ CBP 陽性株は約 3% の割合で存在することが明らかとなりました。本研究結果から、PA を欠失し CBP を有する菌株は、口腔における存在頻度は低いものの、高いコラーゲン結合能による血管内皮細胞への付着侵入能を示すことから、口腔内に広く存在する菌株よりも IE に対する病原性が高いことが示唆されました。

今回の学会では、ポスタープレゼンテーションの際、多くの先生方と活発なディスカッションを行うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。今回の受賞を励みにして、今後も *S. mutans* による IE をはじめとする循環器疾患の病原メカニズムの解明のために日々研究に精進していきたいと考えています。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり御指導くださいました大阪大学名誉教授 大嶋 隆 先生ならびに同大学院歯学研究科 仲野 和彦 准教授に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

3. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

細川 育子

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
口腔微生物学分野 (日本学術振興会特別研究員 PD))

この度、第 60 回 JADR 学術大会におきまして、荣誉ある学術奨励賞に選出され、誠に光栄に存じます。学会会員ならびに評議員の先生方に心から感謝申し上げます。最初に簡単に

はありますが、研究内容を紹介させていただきます。

近年、ヘルパー T 細胞サブセットである Th17 細胞の存在が明らかにされ、Th17 細胞が産生する IL-17 A が関節リウマチなどの炎症性疾患における骨吸収に関与していることが報告されています。また、歯周炎病態形成においても Th17 細胞の関与が示唆されており、病変局所において Th17 細胞の分化や増殖を制御するサイトカインの存在も明らかにされています。一方、Adrenomedullin (AM) は、近年、抗炎症作用をもった内在性の免疫調節因子として作用することが報告されています。しかしながら、AM が Th17 細胞の免疫応答にどのように関与しているのか未だ明らかにされておりません。

Th17 細胞は、IL-17A を産生し、TGF- β と IL-6 によってナイーブ CD4+T 細胞から分化誘導され、IL-1 β や IL-23 がその増殖や生存に重要な役割を果たしています。また、Th17 細胞の分化にはオーファン核内受容体である ROR- γ t や転写因子である STAT3 の活性化が重要であることが知られています。そこで、我々の研究グループでは、AM が Th17 細胞への分化に与える影響について解析を行いました。まず、我々は健康人ボランティアの末梢血より分離したナイーブ CD4+T 細胞を用いて、Th17 細胞への分化条件を確立し、AM 添加時との比較検討を行いました。その結果、Th17 細胞の IL-17A 産生、ROR- γ t の発現、および STAT3 のリン酸化を AM が抑えることを見いだしました。これらの知見は、AM が Th17 細胞の分化や機能を抑制するというを示しており、Th17 細胞が歯周炎の骨吸収に関与していることが示唆されていることから、重要かつ Th17 細胞の制御という新しい発想の治療法に繋がる可能性があるのではないかと考えられます。

今回の学会では、ポスターを見に来てくださった様々な分野における先生方から貴重なご意見やアドバイスをたくさんいただくことができました。また、我々の研究の成果がこのような素晴らしい賞へ繋がり、このような機会を与えてくださった先生方に、感謝申し上げます。この受賞を励みに、さらに努力してまいりたいと思います。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導くださいました徳島大学三宅洋一郎教授、松尾敬志教授ならびに、共同研究者の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

4. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

宮沢 春菜

(新潟大学研究推進機構 超域学術院)

この度第 60 回国際歯科研究学会日本部会におきまして、2012 年度学術奨励賞を受賞させていただき、大変光栄に思うと同時に身の引き締まる思いがいたします。

ここで簡単ではございますが研究内容を紹介させていただきます。歯周炎は動脈硬化性疾患のリスク因子であることが

これまで多くの疫学研究で報告されており、炎症と脂質代謝との関連が示唆されています。我々の研究グループでは、マウスにおける *P. gingivalis* 口腔感染により LXR を中心とした脂質代謝関連遺伝子の発現・血清脂質プロファイルの変動を伴い、動脈硬化病変が進展することを報告しました。しかしながら血清 LDL コレステロールレベル調節には複数の分子が関連しており、感染・炎症との関連においてその詳細なメカニズムについては明らかではありません。近年我々は臨床サンプルの検討において、LDL 受容体 (LDLR) の分解を直接的に誘導する分子である proprotein convertase subtilisin/kexin type 9 (PCSK9) が、歯周炎患者の血清中において有意に上昇していたことを報告しました。そこで本研究では、炎症と脂質代謝に関連して血中の LDL コレステロールレベルの変動の制御機構を明らかにすることを目的とし、特に炎症応答により PCSK9 による LDLR 制御が誘導されるかについて、*P. gingivalis* 感染マウスモデルを用いて検討しました。その結果、*P. gingivalis* 感染による炎症応答の誘導に伴い、肝細胞において PCSK9 の発現を誘導することにより、LDLR の分解が促進され、血清中 LDL コレステロールレベルが上昇することが示唆されました。また PCSK9 の発現調節へのメカニズムとして肝臓における SREBF2 の活性化が明らかとなりましたが、さらに詳細な炎症応答、歯周炎との関連については今後検討が必要だと考えています。

本学会での発表では様々な分野の先生方から多くのご意見・ご指摘を賜り、とても貴重な経験をさせていただきました。またこの度の受賞は私にとって何よりの励みとなりましたので、今後も気を引き締めて日々精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、研究の遂行にあたり直接ご指導くださり、このような素晴らしい機会を与えてくださった山崎和久教授、多部田康一准教授をはじめ、ご協力いただきました全ての先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

5. 2012 年度学術奨励賞を受賞して

森 健太

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座
(口腔治療学教室))

この度、新潟で開催されました第 60 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 学術大会において「Immunological properties of murine periodontal ligament cells」という演題で発表させていただき、学術奨励賞を受賞いたしましたことを大変光栄に感じております。まず、簡単にはありますが研究内容を以下に紹介させていただきます。

歯根膜細胞は歯周組織の恒常性の維持および組織の再生において、重要な役割を果たしていると共に、近年サイトカインやケモカインを産生し免疫応答にも関与しているという報

告があります。本研究では、まず初めに歯根膜細胞において複数の Toll like receptor (TLR) が mRNA レベルで発現していることを明らかにし、さらに TLR リガンド刺激によって産生誘導されるサイトカインは活性酸素ストレスを介している事を明らかとし、歯根膜細胞存在下では T 細胞の増殖活性および IFN γ 産生が抑制されることが明らかとなりました。本研究により、歯根膜細胞はサイトカインおよびケモカインを産生することで局所炎症反応に関与している一方、T 細胞に対しては免疫抑制的に働くことで過度な炎症を抑制し、歯周組織の恒常性を維持に関与している可能性が示唆されました。この結果は、歯周組織再生の観点から注目されがちな歯根膜細胞の新たな機能の一端を示唆するものと考えております。

本学術大会では、様々な分野における先生方が私のポスターに立ち寄り下さり、数多くの質問や貴重なアドバイスを頂きました。日々実験に勤しみ、得られた結果に一喜一憂しながらここまで進んできた結果が、このような素晴らしい賞へと繋がりましたことは、私にとって本当に大きなご褒美となったと同時に、今後一層研究に頑張るようにと激励されているように感じています。大学院生として研究を続けてきた中で様々な問題や困難な事につつまれる事も数多くありましたが、今回の経験を糧にし、研究活動に邁進していく所存です。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり御指導くださいました大阪大学大学院歯学研究科村上伸也教授・柳田学助教、ならびに御協力頂きました全ての先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

VI. 2012 年度 Joseph Lister Award を受賞して

1. 2012 年度 Joseph Lister Award 1 位を受賞して

原田 文也

(北海道医療大学歯学部)

今回、栄誉ある第一回目の Joseph Lister Award において 1 位を頂きましたことを大変光栄に思います。また、同時に今までの苦勞が報われたように感じ、ホッとしています。

お恥ずかしながら、僕自身が今回の研究分野について深い知識を身につけたとか、実験の技術が向上したとは思っておりません。僕が今回の研究活動を通して強く感じたことは発表に至るまでの過程はとて大変な作業であり、研究には膨大な時間、労力とお金を費やすのだということでした。

僕は友人の都倉君と一緒に 4 年時の歯学研究という科目をきっかけに安彦教授の研究室にお邪魔し研究を始めましたが、研究を行える時間は放課後や休日、長期休みの間だけであり、

結果的に他の楽しみの時間を削って実験を行うことになりました。また、テーマが細胞の長期培養を必要とするものだったため、そのほとんどは細胞培養のために費やされ、データを出す作業もうまくいかず様々な問題に直面しました。その都度、研究者として名前を馳せていらっしゃる方々の苦労や困難は計り知れないものなのだと感じさせられました。このような経験から、研究に対する心構えや、実験を行う際に注意すべきことを少しでも学ぶことができたばかりでなく、他の研究者の研究内容やその背景についても興味を持つようになりました。

僕は将来、歯科医師として臨床現場で働いていきたいと思っています。その上でこうした研究の流れを知ることは生涯にわたり歯学を学んでゆくために必要な土台となると思います。このことを気づかせてくれるきっかけとなった Joseph Lister Award の受賞を大変嬉しく思います。

最後にこの場をお借りして安彦教授をはじめお世話になりました方々、共同研究者の都倉くん、そして受験生の身であるにもかかわらず好きなことに時間を費やしている僕を黙って見守ってくれた両親へ感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

2. Joseph Lister Award を受賞して

武田 智香子
(徳島大学歯学部)

この度、第60回国際歯科研究学会日本部会で発表いたしました「Inhibitory effects of Smad3 phosphorylation on wound repair」という演題に対して、Joseph Lister Award を頂きましたことを大変光栄に思います。学生のうちからこのような経験が出来る本当に有難く思います。

私はある授業で、中国奥地のある地域では、口蓋裂発症者に対して手術すら施行されない一方、上顎骨の劣成長が見られない、つまり手術をすることによって成長が阻害されているという話を聞き、この研究に興味を持ちました。本研究は口蓋裂患者に対する口蓋形成術後に生じる癒痕形成の抑制を図ることで、矯正歯科治療に応用しようとするものです。

私がこの度お世話になりました歯科矯正学教室では癒痕形成抑制法の開発を目的として、Smad3 という分子を標的に研究を行っています。Smad3 は TGF- β シグナリングの主要な細胞内因子であり、そのノックアウトマウスの皮膚創傷治癒過程においては、再上皮化の促進が生じることが報告されており、当研究室でも同マウス口蓋において創傷閉鎖が有意に促進し、一方で線維芽細胞の筋線維芽細胞への分化抑制、すなわち癒痕組織形成の抑制が生じることを明らかにしてきました。そして今回、Smad3 遺伝子の局所における機能阻害により、癒痕形成の抑制効果が得られると期待し、Smad3 のリン酸化阻害剤を適用しました。その結果、*in vitro* において上皮細胞遊走能の促進と線維芽細胞の Fibronectin, Coll1A1, Col3A1 の遺伝子発現量低下といった効果が認められました。本研究で用いている Smad3 リン酸化阻害剤 SIS3 は廉価な上、

Smad3 リン酸化を特異的に標的とするため、他の予期せぬ副作用の発現を最小限に抑えられると期待されます。

今後は口蓋のみならず広範囲な医科領域での応用も視野にいれ、将来的には創傷治癒促進ならびに癒痕形成抑制術の一手法として実用化に結び付けていくことが目標です。

最後に、本研究の遂行に当たりご指導くださいました徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔顎顔面矯正学分野の先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

3. Joseph Lister Award を受賞して

船山 祐太
(神奈川歯科大学口腔生化学)

このたび、第60回 JADR 学術大会におきまして、2012年度 Joseph Lister Award を受賞させて頂きました。このような賞をいただきましたことを大変光栄に感じております。

学会理事の先生方や、評議員の先生方に感謝いたします。

今回、ポスターにて「Sequential menatetrenone and risenedronate rescue cortical bone in inactive rat」という演題にて発表させて頂きました。

本研究では、入院加療中の様に活動度の低い期間中にビタミン K2 を予め投与し、活動度が回復した後にアミノビスフォスフォネートであるリセドロネートを投与すれば、活動度の低下による骨の劣化を回避できるという仮説を立て、歩行制限モデルラットを用いて検討いたしました。解析には、p QCT、共焦点顕微レーザーラマン分光法、ナノインデンテーションテストを用いました。

ラマン分光法により、ミネラルもマトリックスも歩行制限モデルでは低下していることが分かり、そしてその骨質の低下は、リセドロネートによって改善されないことも判明いたしました。さらに、歩行制限時にビタミン K2 を投与した群が全指標で最も高い値を示し、歩行制限による骨質の劣化を事前のビタミン K2 が防いでいることも判明いたしました。ナノインデンテーションテストによって、歩行制限群では硬い剛直な骨になることが示されましたが、ビタミン K2 を事前に投与することで、こちらも健常群と同等の値になっておりました。したがって、リセドロネートを単独投与すると、石灰化度は高い骨になるが強度は高くなく、高負荷をかけなくてもおこる骨折をもたらす、これが昨今問題になっている、非定形骨折にも結びつくのではないかと考えられました。本研究の結果から、入院加療中の患者の様に活動度の低い期間中（寝たきり）に VK2 を予め投与し、活動度が回復した後（退院後）にビスフォスフォネートを投与すれば、活動度の低下による骨の劣化を回避できるという可能性が示されました。

JADR 学術大会におきましては、多数の先生方から大変熱心な御質問・御教示をいただき、今後の研究の一層の励みとなりました。今後も研鑽を積んでいきたいと思っております。

最後に、本研究を御指導いただきました、高垣裕子教授、ならびに御指導・御協力頂きました諸先生方に心より感謝を申し上げます。

Ⅶ. JADR Travel Award を受賞して

1. Report of 60th Annual Meeting of JADR — JADR Travel Award 2012

Bayarchimeg Batbayar
(Associate Professor of School of Dentistry,
Department Restorative Sciences,
Health Sciences University of Mongolia)

This year I got the opportunity to participate in the 60th meeting of the JADR held in nice calm place of Japan - Niigata. I was a visiting scholar in the Nippon Dental University some years ago and I was happy to come here again. I like Niigata people, their delicious cuisine and attractive culture.

The conference was active and well organized. Presentations were affected different topics. While I was listening to the lecture series I was proud with presenters and their coworkers. I saw what level achieved the modern dentistry. Subjects were examined from wide aspects used the most developed technique and skills, their results were very interesting and promising. I learned a lot. The meeting held in English language, however participants could speak fluently and I did not felt difficulties in communication. Despite my poor Japanese language I could also speak to people in Japanese and when people could understand me I enjoyed very much.

Members of Mongolian Section of IADR always appreciate JADR promotion to investigators of Mongolia. Thank you very much for the chance to be with you!

I wish you a very best in your scientific examinations!

2. Report of 60th Annual Meeting of JADR — JADR Travel Award 2012 —

Felicity Crombie
(Melbourne Dental School, Melbourne, Victoria, Australia)

This December I was lucky enough to be selected as one of the JADR Travel Award recipients and attend the 2012 Niigata conference. This was an excellent opportunity to see the great variety of research being undertaken and, more importantly, to be able to discuss it with those involved in the work. I particularly enjoyed hearing about dental research which is quite different in focus to the majority being undertaken at my home institution, and that it is not always restricted to the dental field with potential for broader medical applications sometimes. I have made several contacts which I hope will allow for some international collaborative research to be undertaken in the future. The conference was well organised, the facilities were good and I felt very welcome in Japan. I also enjoyed the chance to see a little of Niigata: the view from the convention centre was great with mountains on one side and the water on the other, very different from home! The conference was a

great experience, I am very grateful to have received the assistance of the travel award and I hope to be able to return to Japan some day.

3. Report of 60th Annual Meeting of JADR — JADR Travel Award 2012

Fahad Karim Kidwai
IADR-SEA winner 2012
(Faculty of Dentistry, National University of Singapore,
Singapore)

Since, I won IADR-SEA travel award last year which gave me this opportunity to visit Japan to present my work 'multilayer epithelium formation from human embryonic stem cells derived keratinocyte' in Japan Dental Association (JADR) annual meeting 2012-Niigata. I found it a good chance to explore Japan; therefore I decided to spend 2 weeks in Japan. I visited different places in Japan and finally landed in Niigata for a conference. Conference was in Toki Messe conventional center which is state of art. The conference was superbly organized and people were found to be very friendly and humble. I was always treated with great respect and honor. Beside this, I found the JADR meeting informative and it gave me this opportunity to meet good researchers from all over the world especially from Japan. I was not surprised to see the elite level of research which is underway in different dental research labs in Japan. No doubt they are doing great job.

My overall experience was great and I would highly recommend everyone to visit japan and to attend JADR annual meeting every year.

4. JADR Travel award 2012

Cho Young Dan
(School of Dentistry, Seoul National University)

Last year, I got a 'JADR travel award', and I looked forward to visit to JAPAN. I visited JAPAN many times, however, Japanese conference at Nigata was first time. Nigata was clean and beautiful city, and a night view at the Tokimesse was very nice. It was sorry that the weather was cold and rainy.

During the JADR meeting, it was great honor to meet many good experts, and I could grasp the trend of Japanese dental research in the JADR. Especially, I got a great impression to young zealous investigators, and resolved to shape up. All JADR members were very kind and meeting was well organized. I hope to meet JADR members in the KADR meeting annually and 2016 IADR annual meeting in Seoul, especially. Thank you for JADR about the great experience in Nigata.

VIII. 第31回 IADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告

JADR 会長 村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究所口腔分子免疫制御学講座 (口腔治療))

KADR と JADR は相互交流活動の一環として、毎年お互いの学術大会に invited speaker を招聘し、学術交流を行っています。第60回 JADR 学術大会は、新潟大学の山崎和久大会長の下、新潟朱鷺メッセにて2012年12月14、15日の日程で盛大に開催されました。同学術大会には KADR からの invited speaker として Sang-Wan Shin 先生 (KADR 会長, Korean University) が、“Long-Term Treatment Outcome and Current Perspective in Implant Dentistry” のタイトルで特別講演されました。

本年の JADR の学術大会に先んじて、今年の第31回 KADR 学術大会は11月30日、12月1日の両日にソウル市内の Sejong University にて開催されました。本年度は、KADR 会長の Shin 先生からご招待を受け、私が JADR からの invited speaker として講演の機会を頂戴しました。11月30日に関西空港より韓国に向けて出発し、金浦空港では Frank H Yu 先生 (Program in Neurobiology, Seoul National University) の出迎えを受けました。ホテルに荷物を置いて、直ちに会場の Sejong University の最上階にある Kwang-Gae-To ホールに向かいました。今回の KADR 学術大会は “Basic and Clinical Roadmap in Regenerative Dentistry” をメインテーマに掲げて構成されており、初日は基礎研究、2日目は橋渡し研究を中心にプログラムが編成されていました。両日の口頭発表はすべて30分の講演時間を与えられたシンポジウム形式で、シニアの先生方の講演で構成されていました。初日の特別講演では、米国 UCSF の Dr. Ophir Klein (Departments of Orofacial Sciences and Pediatrics and the Institutes for Human Genetics and Regeneration Medicine) が、“Long in the tooth: the rodent incisor as a model for adult epithelial stem cells” の演題で、2日目は私が “Periodontal Tissue Engineering – the present status and future perspective -” の演題で特別講演を行いました。一般演題は、全てポスター発表で行われており (全67題)、それに加えて Hatton Award Competition (本年度は12題がエントリー) も行われました。本年度のメインテーマのせいもあってか、ポスター発表のほとんどが分子生物学、発生学、Tissue Engineering に関するものであり、いずれの発表も大変レベルの高い内容のものばかりでした。私は、ヒト型リコンビナントサイトカインを用いた歯周組織再生療法と、脂肪組織由来間葉系幹細胞移植による歯周組織再生療法の開発の現状を紹介させていただきました。講演直後に、臨床応用に向けた課題解決に関する具体的な質問をいくつかお受けしましたし、講演終了後も、みんなの前で質問するのをためらっていたのかな、と思われる大学院生の方々から、具体的な実験方法等に関する質問をおうけ

しました。KADR の聴衆の先生方に何かをお伝えすることが出来たのであれば、大変ありがたい事だと思います。

学術大会とは直接の関係は無いかもしれませんが、御世話になった KADR の先生方との会食は、思い出に花を添えます。初日の夜の夕食は、会場となった Sejong University の学食で行われました。Buffet 形式の夕食会で、学会参加者がおそらく皆参加されていたのではないのでしょうか。カジュアルな雰囲気、多くの参加者と、挨拶をし、意見を交わす機会を得ました。学会が終わった2日目の夜は、Shin 会長、Choi Seong Ho 教授 (Yonsei University)、Richard Leesungbok 教授 (Kyung Hee University)、そして Yu 先生と共に韓国焼肉のお店に夕食に出かけました。「2016年にソウルで開催される IADR の準備は、これからが本番」とのことでしたが、KADR の先生方の熱い思いを感じる事が出来ました。その後、場所を何度か変えて、4時間に及ぶ夕食会となり、韓国のお酒も一通りいただきました。今回の KADR 学術大会の成功を皆で祝い、今後の



講演後の記念写真



KADR 執行部の先生方との昼食会

JADR-KADRの緊密な連携を約束し、その夜はお開きとなりました。既に何度か学会でお目にかかっていた先生たちですが、今回 JADR の代表として講演の機会を与えていただいたことにより、その先生方との関係はいっそう緊密になり、今後遭遇するかもしれない様々な課題に対して率直な意見交換が出来る関係が構築できたものと思います。この経験を、今後の JADR の活動に活かしていきたいと思っております。最後になりましたが、このような機会を与えていただいた皆様に感謝を申し上げます。

IX. 理事会、評議員会および総会報告

JADR 幹事 山田 聡

(大阪大学大学院歯学研究科
口腔分子免疫制御学講座歯周病分子病態学)

2012年度の理事会は、2月20日、5月21日、8月27日、12月13日の計4回開催された。

評議員会および総会は、第60回 JADR 学術大会時の12月14日に、会場である新潟コンベンションセンター(朱鷺メッセ)において開催された。会の冒頭で評議員会成立のための定足数を満たしていることが確認され、今里聡先生(大阪大学)の1名が議事録署名人として選出された。

以下、評議員会および総会において決定された2013年度の事業計画および予算案等について報告する。

1) 2013年度事業計画について

以下の2013年度事業計画が提案され満場一致で承認された。

- 理事会 : 4回開催(2, 5, 8, 11月)
- 評議員会・総会 : 第61回学術大会開催時(8月)
- 学術大会 : 第61回学術大会(第2回 APR 学術大会と併催, タイ・バンコク)
8月21~23日に Plaza Athenee にて開催
大会長 Dr. Pasutha Thunyakitpisal
(Chulalongkorn University)
- 各種委員会 : 学術奨励賞選考委員会の設置
- Newsletter : 年2回発行(3月, 9月発行予定)
- Mail News : 年4回程度を予定
- 日本歯科医学会理事会出席(陪席)
- KADR 学術大会へ講師派遣
- IADR 2013年度評議会へ役員派遣
- APR 2013年度運営委員会へ役員派遣
- 2014年度 Hatton Award 候補者選考
- IADR 各種 Committee 委員へ JADR 会員推薦
- IADR 本部へ JADR Annual Report 提出

2) 2011年度会計決算および2013年度会計予算(案)について

会計決算は、大谷啓一監事ならびに小田 豊監事による監

査承認後、第1回理事会承認を経て、評議員会および総会において満場一致で承認された。2013年度会計予算案は、第4回理事会で承認を経て、評議員会および総会にて満場一致で承認された。

3) 会則改訂(案)について

村上会長より JADR 会費の値上げに伴う会則の改訂(案)について説明があり、満場一致で承認された。

4) 次期役員および評議員について

役員選出規程に従い、下記の JADR 次期役員(案)が上程され、第4回理事会の議をへて、評議員会および総会で満場一致で承認された。また役員選出規程に従い JADR 次期評議員の選出が行われ、理事会承認をへて会長がこれを委嘱した。任期はいずれも2013年1月1日から2014年12月31日まで。

役員名簿(2013-2014)

会長	高橋 信博	東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野
副会長	高田 隆	広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学
前会長	村上 伸也	大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学教室
会計理事	山崎 和久	新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野
理事	天野 敦雄	大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座予防歯科学教室
理事	佐々木啓一	東北大学大学院歯学研究科口腔機能形態学講座口腔システム補綴学分野
理事	柴田 俊一	東京医科歯科大学大学院顎顔面解剖学分野
理事	中村 誠司	九州大学大学院歯学研究科口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野
理事	桃井 保子	鶴見大学歯学部保存修復学講座
理事	森山 啓司	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野
理事	今里 聡	大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座歯科理工学教室
理事	上條竜太郎	昭和大学歯学部口腔生化学教室
監事	高野 吉郎	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野
監事	小田 豊	東京歯科大学歯科理工学講座

評議員名簿(2013-2014)

北海道医療大学	安彦 善裕
北海道大学	横山 敦郎
岩手医科大学	佐原 資謹
奥羽大学	清浦 有祐

東北大学	島内 英俊
明海大学	渡部 茂
日本大学松戸歯学部	小方 頼昌
東京医科歯科大学	小野 卓史
東京歯科大学	石原 和幸
日本歯科大学	砂田 勝久
日本大学	松村 英雄
昭和大学	新谷 悟
神奈川歯科大学	浜田 信城
鶴見大学	大久保力廣
新潟大学	井上 誠
日本歯科大学新潟生命歯学部	新海 航一
松本歯科大学	増田 裕次
朝日大学	堀田 正人
愛知学院大学	千田 彰
大阪歯科大学	田中 昌博
大阪大学	林 美加子
岡山大学	窪木 拓男
広島大学	栗原 英見
徳島大学	松香 芳三
九州歯科大学	細川 隆司
九州大学	石川 邦夫
福岡歯科大学	尾崎 正雄
長崎大学	吉田 教明
鹿児島大学	野口 和行

5) 終身会員推挙について

会則に従って、以下の会員（敬称略）が理事会より終身会員として推薦され、評議員会および総会において満場一致で承認された。

水谷 紘
岡崎 正之
伊東 隆三
古屋 良一
今井 奨
小林 義典
大塚吉兵衛

6) 2013 Hatton Awards 候補者の紹介

2012 年度第 3 回理事会で決定された、2013 IADR Seattle 大会 Hatton Awards 日本代表候補者 4 名（五十音順、敬称略）が紹介された。

Senior Basic Science Category

安藤 俊範
（広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学教室）
伊山 舜吉
（大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学教室）

鈴木 航
（昭和大学歯学部口腔生化学教室）
渡辺 千穂
（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学）

X. 第 61 回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会／第 2 回 APR 学術大会のご案内

第 61 回 JADR 総会・学術大会は、2013 年 8 月にタイ、バンコクで開催される第 2 回 IADR Asia Pacific Region (APR) 学術大会と併催で行われます。したがって、本年は国内の学術大会は開催されませんので、あらかじめご了承くださいませよう、お願いいたします。なお、第 2 回 APR 学術大会の詳細ならびに本年度総会につきましては、ホームページおよびメールニュースにて改めてご連絡させていただきます。

JADR 会員の皆様の積極的な参加を期待します。

The 2nd Annual Meeting of IADR Asia Pacific Region

Date: Aug. 21-23, 2013

Venue: Plaza Athenee -a Royal Méridien Hotel, Bangkok

Host: IADR Asia Pacific Region
IADR / Southeast Asia

Co-host: IADR /Japan
IADR / Korea
IADR / China
IADR / Australia-New Zealand
IADR / Mongol
IADR / India
IADR / Pakistan

Organizer:
IADR Southeast Asian Division
Faculty of Dentistry, Chulalongkorn University, Thailand

Chairman:
Dr. Pasutha Thunyakitpisal

Secretary General:
Dr. Risa Chaisuparat

演題登録締切：2013 年 4 月 30 日（火）

早期事前参加登録締切：2013 年 6 月 21 日（金）

事前参加登録期間：2013 年 6 月 22 日（土）- 8 月 15 日（木）

当日参加登録期間：2013 年 8 月 16 日（金）- 8 月 23 日（金）

詳細につきましては、IADR-APR Meeting の Website (<http://apr-iadr2013.org>) をご覧ください。

JADR 企画シンポジウム

講演予定者：

天野 敦雄先生

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座予防歯科学分野)

佐藤 拓一先生

(東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野)

中島 貴子先生

(新潟大学大学院医歯学総合病院歯科総合診療部)

二階堂 徹先生

(東京医科歯科大学歯学部ウ蝕制御学分野)



XI. 第91回 IADR 総会・学術大会 (Seattle, Washington) のレポーター募集

ご存知のとおり 2013 年 3 月 20 日 (水) ~ 23 日 (土), Seattle (Washington) で第 91 回 IADR 総会・学術大会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方から IADR 大会の様子など 9 月発行予定の JADR Newsletter 第 2 号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。

レポーターをお引受けいただける先生は、大会報告を 4 月 30 日 (火) までに事務局へお送り下さい。多数お待ちしております。

.....
字 数：1200 字程度 締切：4 月 30 日 (火)

執筆内容：第 91 回 IADR Seattle 大会に各自が参加した分野の報告。シンポジウム、ポスター、口頭発表などから自由に記載 (過去のニュースレター参照)

原稿送付方法：TEXT file か MS WORD で、E-mail にて事務局へ送付
.....

XII. Hatton Award 応募候補者 (2014 年度 IADR, Cape Town, South Africa) の募集

2014 年度の Hatton Award 応募候補者を募集します。応募ご希望の方は 5 月以降に HP に掲載します応募要領をご覧ください。応募下さい。

本賞は第 10 代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門、Senior- Basic Science 部門、Senior-ClinicalResearch 部門の 3 部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は第 92 回 IADR 総会の前日に行われる Hatton Award 本選にて審査を受け、各部門上位 2 名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各部門への応募資格と研究内容の区分は、以下のようになります。

Junior 部門：

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究、臨床研究を問いません。

Senior 部門：

大学院在籍者、研究生、専攻生等による研究発表です。博士号既得者の場合、本選時に博士号取得後 3 年以内であれば応募できます。

Senior 部門は、下記 2 つの分野に分かれます。

- ・ Basic Science Research : Involving laboratory or animal research
- ・ Clinical/Pre-clinical Research : Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

CONTENTS

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して	1	I. Greetings of the New JADR President Dr. Nobuhiro Takahashi: JADR Presiden	1
II. JADR 会長退任のご挨拶にかえて	2	II. Experience as President of JADR Dr. Shinya Murakami : JADR Immediate Past President	2
III. 新任・退任理事からの挨拶	2	III. Greeting from Director new appointment / retirement	2
1. 理事退任のご挨拶	2	1. On the JADR Director retirement Dr. Tsuji Nishihara : JADR Past Director	2
2. 理事を拝命して—To show presence of Japan—	3	2. Greeting from the new JADR Director Dr. Satoshi Imazato : JADR Director	3
3. 理事就任にあたって	4	3. Greeting from the new JADR Director Dr. Ryutaro Kamijo : JADR Director	4
IV. 第 60 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告	4	IV. Reports of the 60th JADR General Session	4
1. 第 60 回 JADR 総会・学術大会統括報告	4	1. Summary of the 60th Academic Meeting of JADR Dr. Kazuhisa Yamazaki: Chairman of the 60th Academic Meeting of JADR	4
2. シンポジウム I 報告 Distinguished Lecture Series —The Cutting Edge of Dental Science in Japan—	5	2. Symposium 1 Dr. Yoshiro Takano : Tokyo Med. Dent. Univ.	5
3. シンポジウム II 報告 Impact of Oral Health on the Systemic Health; Lessons from Human and Animal Studies	6	3. Symposium 2 Dr. Atsuo Amano : Osaka Univ.	6
4. シンポジウム III 報告 Biological Perspective of Future Prosthodontics	7	4. Symposium 3 Dr. Katsumi Uoshima : Niigata Univ.	7
V. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	7	V. 2012 JADR/GC Young Investigator Award	7
1. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	7	1. Dr. Emilio Satoshi Hara : Okayama Univ.	7
2. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	7	2. Dr. Ikuko Hosokawa: Tokushima Univ.	7
3. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	8	3. Dr. Kenta Mori : Osaka Univ.	8
4. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	8	4. Dr. Haruna Miyazawa: Niigata Univ.	8
5. 2012 年度学術奨励賞を受賞して	9	5. Dr. Ryota Nomura: Osaka Univ.	9
VI. 2012 年度 Joseph Lister Award を受賞して	9	VI. 2012 JADR/Joseph Lister Award	9
1. 2012 年度 Joseph Lister Award 1 位を受賞して	9	1. Mr. Fumiya Harada : Health Sciences Univ. of Hokkaido	9
2. Joseph Lister Award を受賞して	10	2. Ms. Chikako Takeda : The Univ. of Tokushima	10
3. Joseph Lister Award を受賞して	10	3. Mr. Yuta Funayama : Kanagawa Dental College	10
VII. JADR Travel Award を受賞して	11	VII. JADR Travel Award 2012	11
1. Report of 60th Annual Meeting of JADR – JADR Travel Award 2012	11	1. Dr. Felicity Crombie : Melbourne Dental School	11
2. Report of 60th Annual Meeting of JADR – JADR Travel Award 2012 –	11	2. Dr. Young-Dan Cho : Seoul National Univ.	11
3. Report of 60th Annual Meeting of JADR – JADR Travel Award 2012	11	3. Dr. Bayarchimeg Batbayar : Health Sciences Univ. of Mongolia	11
4. JADR Travel award 2012	11	4. Dr. Fahad Karim Kidwai : National Univ. of Singapore	11
VIII. 第 31 回 IADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告	12	VIII. Report of the 31th KADR Academic meeting Dr. Shinya Murakami : JADR President	12
IX. 理事会, 評議員会および総会報告	13	IX. Report of the Board Meeting, Annual Business Meeting and the Councilor Meeting Dr. Satoru Yamada : Osaka Univ.	13
X. 第 61 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会/第 2 回 APR 学術大会のご案内	14	X. Announcement of the 61 JADR General Session	14
XI. 第 91 回 IADR 総会・学術大会 (Seattle, Washington) のレポーター募集	15	XI. Call for Reports of the 91th IADR General Session in Seattle	15
XII. Hatton Award 応募候補者 (2014 年度 IADR, Cape Town, South Africa) の募集	15	XII. Call for the Hatton Awards Competitors of the 92th IADR General Session in Cape Town, South Africa (2014) from JADR	15

●編集後記●

JADR は 2012 年に還暦を迎え、記念すべき第 60 回総会ならびに学術大会が山崎会長のもとで盛大に開催されました。その様子が本号に詳しく記載されています。同大会では学術奨励賞など多くの表彰が行われ、我が国の歯学研究の発展と世界への発信を担う若手研究者の皆様の意気込みが、受賞報告に述べられています。2013 年の幕開けとともに、村上前会長から高橋会長にバトンが渡され、学会役員の変更もありました。この度ご退任される村上会長と西原理事の示唆に富むお言葉をいただきました。村上前会長におかれましては、JADR の財政基盤整備や学会の学際性・国際性の更なる向上へのご尽力に対しまして、改めて感謝申し上げます。巻頭には高橋会長のもとで進められる次の 60 年に向けた取組みが述べられています。新しく理事に就任された今里先生と上条先生からも力強いお言葉をいただきました。IADR President-elect に就任された安孫子先生のご指導をいただきながら、JADR のますますの発展が大いに期待されます。JADR の情報交換の場として、引き続きニュースレターの充実に努めたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://jadr.umin.jp/>

連絡先: 〒 612-8082 京都市伏見区両替町 2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR 副会長 高田 隆 (広島大学医歯薬保健学研究院口腔顎顔面病理病態学)

連絡先: 〒 734-8553 広島市南区霞 1-2-3 FAX: 082-257-5619

2013 年 2 月 28 日 発行